

2026.1.26

株式会社みんなの銀行

マネーインサイトラボ、2025年度最新版「資産運用実態レポート」を発表 銀行アプリのリアルデータによる保有銘柄ランキングも公開

マネー感度が高いZ世代のNISA利用率は77.1%、9割以上が投資信託に投資

株式会社みんなの銀行（取締役頭取 永吉 健一、以下「みんなの銀行」）と、iBankマーケティング株式会社（代表取締役社長 福田 公威、以下「iBankマーケティング」）が共同運営する、お金に関する調査・研究組織「マネーインサイトラボ」が銀行アプリのリアルデータ分析を基にした2025年度最新版「資産運用実態レポート」を発表しました。

2025年度最新版「資産運用実態レポート」（別紙参照）

今回のレポートは、みんなの銀行の資産管理サービス「レコード」に連携された実際の資産運用データを統計的に処理した「リアルデータ分析」の結果を基にしたものです。

2024年の新NISA開始以降、資産運用への関心が高まり、2025年12月26日に閣議決定された令和8年度税制改正大綱では、「こどもNISA」の新設や、暗号資産の申告分離課税への移行検討が盛り込まれるなど、NISA制度のさらなる拡充により資産形成の裾野は全世代へと広がっていこうとしています。こうした流れを受けて、レコードを利用し、投資口座の管理にも活用している「投資アクティブ層」を対象に、2025年度最新の投資の実態を分析しました。

【調査サマリー】

- 【NISA】普及率：投資口座を連携している層の約7割が利用、新NISA開始で利用加速
- 【NISA】Z世代の活用意欲：10～20代（Z世代）のNISA口座保有率は77.1%、全年代で最も高い
- 【NISA】投資対象の傾向：全年代で9割以上が投資信託に投資、年代が上がるにつれて個別株も
- 【NISA】運用リターン：市場好況により全年代で右肩上がり、30代・40代では25%超え
- コア・サテライト戦略：Z世代は「投信」をコアとしつつ、9.5%が「暗号資産」を保有
- 資産管理：投資アクティブ層の4割が6個以上の金融機関を使い分け

「マネーインサイトラボ」について

マネーインサイトラボは、ふくおかフィナンシャルグループ傘下のみんなの銀行とiBankマーケティングが共同運営するお金に関する調査・研究組織です。デジタル時代における、人々のお金に関する意識・価値観・行動の変化や、新しい金融サービスの可能性について新たな視点を見出すことを目的に活動しています。

本件に関するお問合せ先

株式会社みんなの銀行 広報担当:今村・市原・岡 TEL:092-791-9231 E-mail: pr@minna-no-ginko.com



【2025年度最新版】

銀行アプリの「リアルデータ」が明かす

資産運用実態レポート

マネー感度が高いZ世代のNISA利用率は77.1%
若年層の着実な資産形成と運用状況が判明

2026.1.26 マネーインサイトラボ

はじめに

ふくおかフィナンシャルグループ傘下のみんなの銀行とiBankマーケティングが共同運営する「マネーインサイトラボ」では、デジタル時代における人々の意識・価値観・行動の変化に関する調査・研究を実施しています。

今回のレポートでは、みんなの銀行の資産管理サービス「レコード」を利用し、投資口座の管理にも活用している「投資アクティブ層」を対象に、投資の実態を分析しました。

2024年の新NISA開始以降、資産運用への関心は全世代で高まっています。金融庁の調査^{*1}によると、2025年6月末時点のNISA総口座数は約2,696万口座に達し、2025年上半期に増加したNISA口座のうち10~20代が3割超を占めるなど、Z世代を中心とした若年層の投資意欲が顕著に表れています。

また、2025年12月26日に閣議決定された「令和8年度税制改正大綱」では、18歳未満を対象とした「こどもNISA」の新設や、暗号資産の申告分離課税（一律20.315%）への移行検討が盛り込まれました。NISA制度のさらなる拡充により、資産形成の裾野は全世代へと広がっていこうとしています。

こうした流れを受け、マネーインサイトラボでは、2025年度最新の投資行動の実態を解明すべく、本分析を実施しました。

*1 令和7年9月24日NISA口座の利用状況に関する調査結果の公表について | 金融庁

<https://www.fsa.go.jp/policy/nisa/20250924.html>

レポートの特徴/分析サマリー

本レポートは、アンケートによる「意識調査」ではなく、みんなの銀行の資産管理サービス「レコード」に連携された実際の資産運用データを統計的に処理した「リアルデータ分析」です。そのリアルなお金の動きから、投資口座を保有し、資産・家計管理にデジタルツールを活用している「投資アクティブ層」の投資の実態を浮き彫りにしていきます。

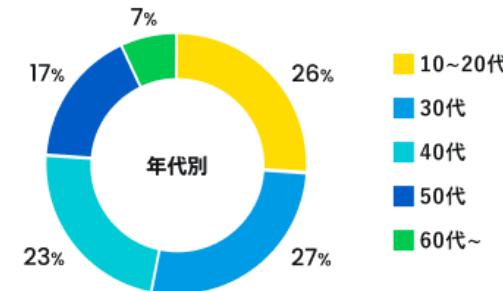
● ● 分析データ概要

対象：みんなの銀行「レコード」に投資口座を連携しており、2025年中にその投資口座の更新があった利用者（年代分布は右記グラフ参照）

サンプル数：3,736（うち、NISA口座あり 2,412、投資信託保有 2,989）

データ断面：2025年11月30日時点（2024年、2023年のデータは各年12月31日時点の数値）

[みんなの銀行レコード機能詳細ページ ►](#)



- ※ 本レポートは、みんなの銀行アプリのアグリゲーションサービス「レコード」のデータ、及びお客様の属性情報を当社にて編集・集計したものです。プライバシー保護のため、個人を特定できる情報はすべて削除し、統計的に処理したデータのみを使用しています。なお、「レコード」のデータは株式会社マネーフォワード、および、マネーフォワードエックス株式会社からお客様の第三者提供の同意の上でみんなの銀行に提供されています。
- ※ 資産管理を積極的に行っている投資アクティブ層が分析対象であるため、日本の同年代全体の平均値とは異なる傾向がある点にご留意ください。
- ※ 各データの内訳は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計が必ずしも100%にならない場合があります。

● ● 分析サマリー

【NISA】普及率

投資口座を連携している層の約7割が利用、新NISA開始で利用加速

【NISA】Z世代の活用意欲

10~20代(Z世代)のNISA口座保有率は77.1%、全年代で最も高い

【NISA】投資対象の傾向

全年代9割以上が投資信託に投資、年代が上がるにつれて個別株も

【NISA】運用リターン

市場好況により全年代で右肩上がり、30代・40代では25%超え

コア・サテライト戦略

Z世代は「投信」をコアとしつつ、9.5%が「暗号資産」を保有

資産管理

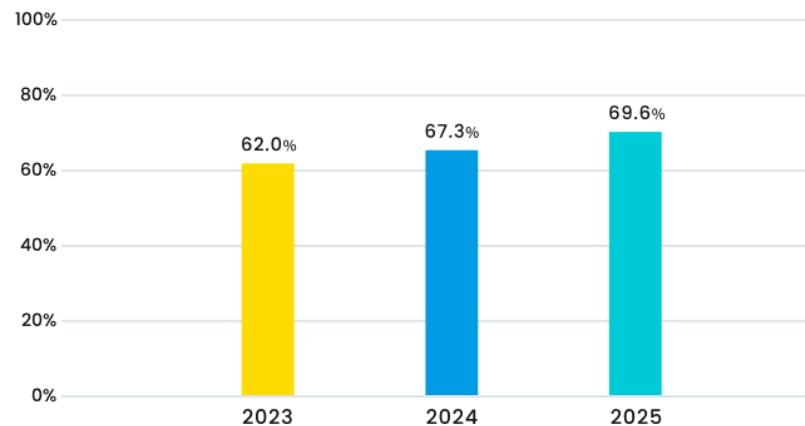
投資アクティブ層の4割が6個以上の金融機関を使い分け

①アプリで資産管理を行う層の約7割がNISAを利用

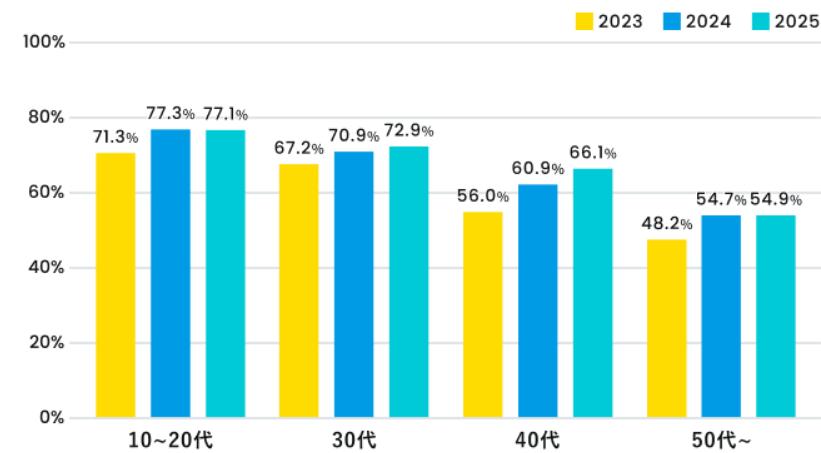
2024年1月1日の新NISA開始がひとつのきっかけとなり、投資口座の管理に「レコード」を活用している利用者のNISA口座保有率も増加しています（図1-1）。2023年末に62.0%だったのが、2025年には69.6%と7.6%増えており、これは制度の浸透度が一段と高まっていることを示しています。投資にとってNISAは資産形成を行う上での「必須のインフラ」として定着しつつある実態が明らかになりました。

年代別に見ると、特に10～20代を中心としたZ世代の活用状況が際立っています。Z世代の保有率は2025年時点で77.1%に達しており、30代（72.9%）や40代（66.1%）を上回る結果となりました。若年層にとって、NISAを利用するることは「特別な投資行動」ではなく「標準的な資産形成手段」となってきていることが伺えます（図1-2）。

● ● 1-1. NISA口座保有率の推移



● ● 1-2. 年代別NISA口座保有率の推移



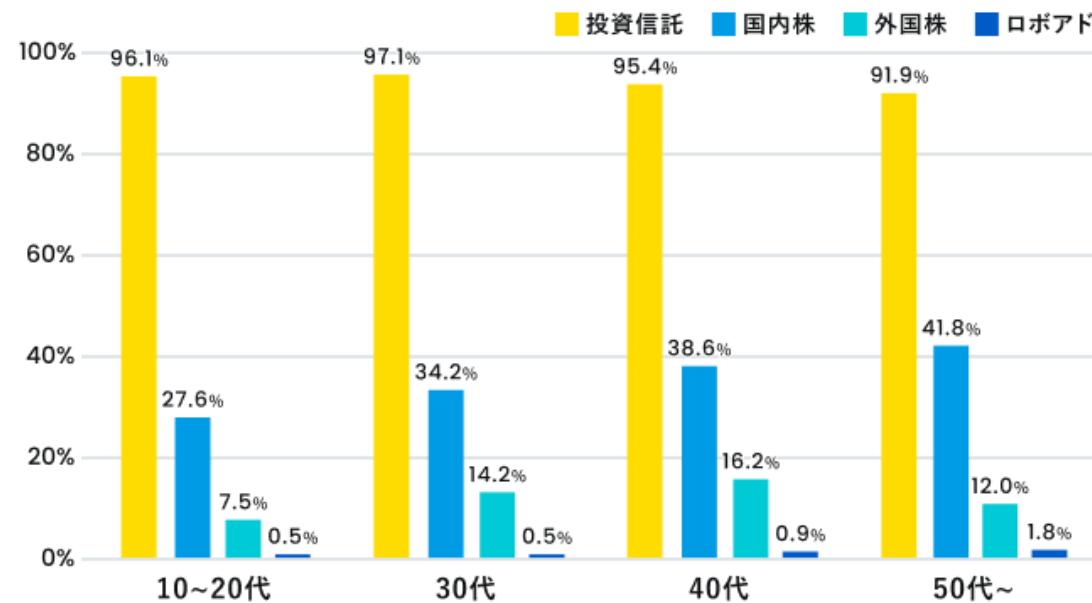
② 全世代で「投資信託」圧倒的シェア、年代上昇に伴い個別株増加

続いて、NISA口座で保有されている資産カテゴリを分析したところ、全年代を通じて「投資信託」が圧倒的な支持を得ていることがわかりました（図2-1）。

全年代で保有率が9割を超えており、「新NISAといえば投資信託」という認識が定着している様子がうかがえます。

一方で、年代別の顕著な違いは「国内株」や「外国株」の保有率に表れています。年代が上がるにつれて個別株の保有率は上昇し、40代以上では「国内株」の保有者は約4割に達します。投資対象の多様化を後押ししている背景には、資金余力の高まりや投資経験の蓄積があると考えられます。

● ● 2-1. 年代別NISA口座カテゴリー別保有率 (対象：NISA口座ありの利用者)



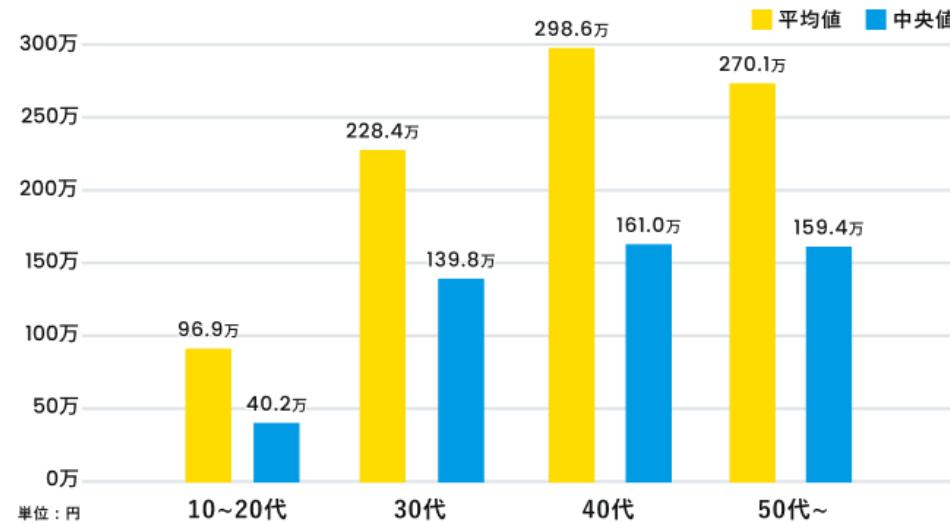
② 全世代で「投資信託」圧倒的シェア、年代上昇に伴い個別株増加

では、これらのNISA枠にどのくらいの金額を投資しているのでしょうか。NISA口座投資額（元金）を見ると、40代が全年代で最も多く、平均値298.6万円、中央値161.0万円に達していることがわかりました（図2-2）。

30代から40代にかけて投資額が大きく伸びており、ライフステージの進展に伴い、将来への備えを本格化させていることがうかがえます。一方、Z世代にあたる10～20代は平均96.9万円、中央値40.2万円となっており、まずは少額から資産形成をスタートさせている段階であるといえます。

また、全年代において平均値が中央値を大きく上回っており、投資アクティブ層の中でもより積極的な利用者が全体の平均を押し上げている傾向が見て取れます。

● 2-2. 年代別NISA口座投資額(元金)
(対象：NISA口座ありの利用者)



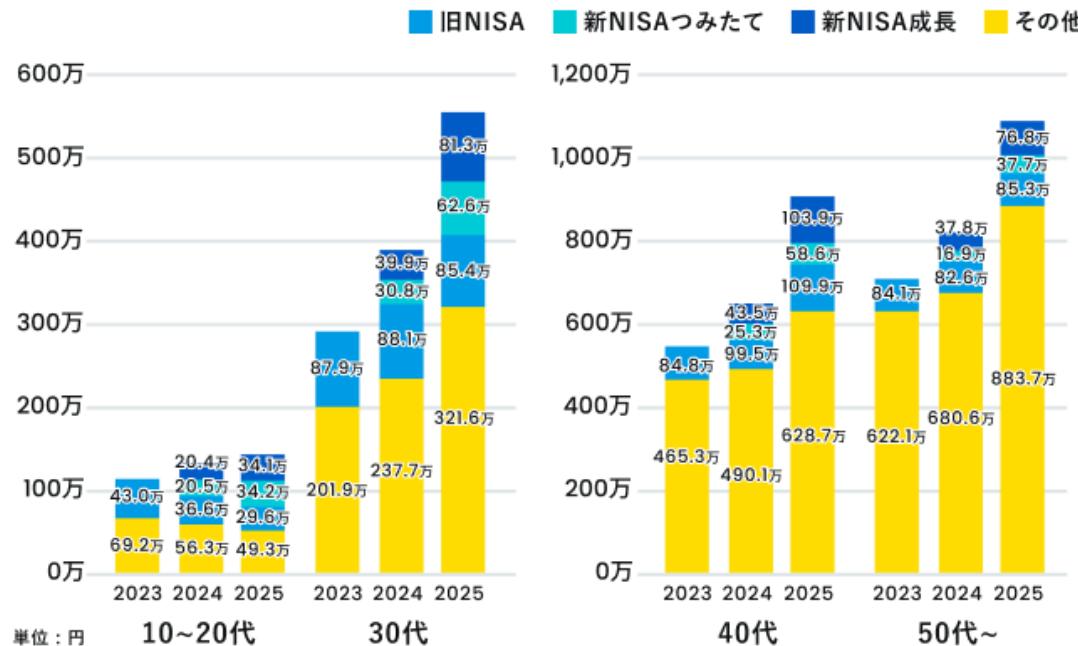
② 全世代で「投資信託」圧倒的シェア、年代上昇に伴い個別株増加

NISA枠以外も含めた投資額の推移を詳細に見ると、新NISAへの向き合い方には年代間で明確な違いがあるようです（図2-3）。

Z世代にあたる10～20代は、新NISAの開始に伴い、既存の投資資産を新制度へ積極的に「移管」している傾向が読み取れます。対して30代以降は、既存資産を維持しつつ、新規資金を新NISAに投入する「追加投資」の動きが強まっており、資産形成のスピードをさらに加速させていくようです。

また、新NISAの利用内訳については、年代が上がるにつれて「つみたて投資枠」よりも「成長投資枠」の比率が高くなる傾向にあります。これは、年齢と共に高まる資金余力や投資経験の差が、投資枠の使い分けに反映されているものと考えられます。

● 2-3. 年代別投資額(元金)平均値の推移



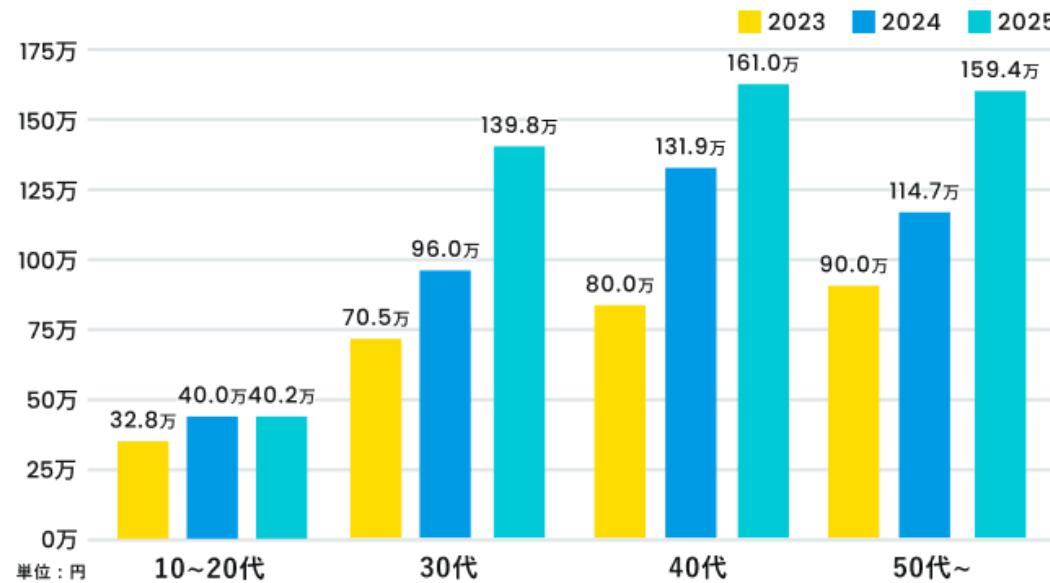
③ 【運用成績】全世代で元金・含み益が着実に拡大

NISA口座に絞り、2023年から2025年にかけての投資額(中央値)の推移を見てみると、全年代で着実に増加していることがわかります（図3-1）。

特に30代以上において、投資を活発化させる動きが顕著で、なかでも30代・40代の投資額は、この2年で、約2倍と大幅な伸びを記録しました。

新NISAの開始をきっかけに、将来のライフイベントを見据えた現役世代の資産形成が一段と加速している実態が浮き彫りとなりました。

● ● 3-1. 年代別NISA口座投資額(元金)中央値の推移
(対象：NISA口座ありの利用者)



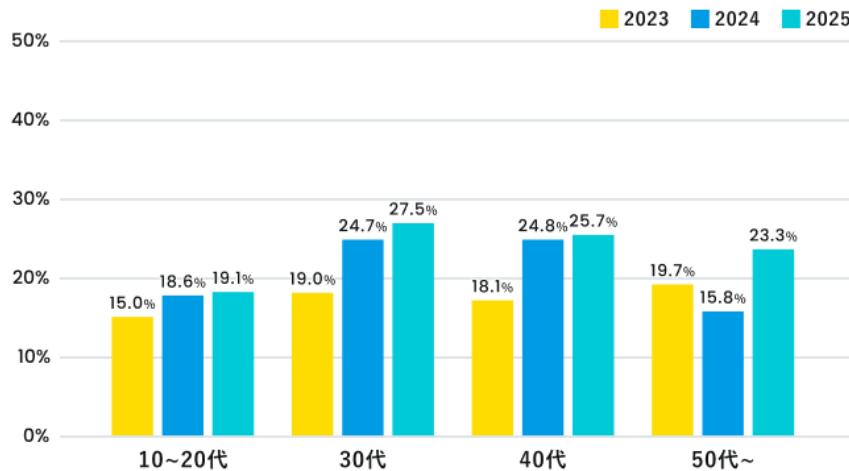
③ 【運用成績】全世代で元金・含み益が着実に拡大

運用成績の指標となる含み益率も、NISA口座では全年代で右肩上がりの推移を見せていました。2025年には30代が27.5%、40代が25.7%と、極めて高いリターンを記録しました（図3-2）。

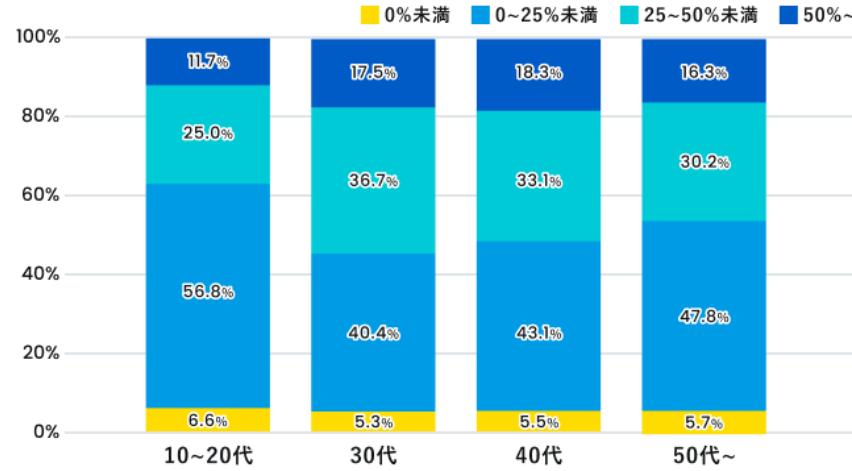
年代別NISA口座含み益率の推移を詳しく見ると、2024年8月の暴落の影響を受けたためか、外国株式など比較的高リスクな資産カテゴリの比率が高い50代以上については、含み益の伸びが一時的に鈍化する場面もありましたが、2025年には力強い回復を見せていました。また、Z世代にあたる10～20代も、投資額の増加に合わせて含み益が着実に拡大しています。新NISAの開始と市場の好況が相まって、若年層からベテラン層まで、幅広い世代において着実な資産形成が後押しされている様子がうかがえます。

また、2025年時点で、含み損を抱えている層は全年代で7%未満に留まっていますが、市場の好調を背景に、多くの利用者が資産形成の成功体験を積んでいる状況です（図3-3）。

● ● 3-2. 年代別NISA口座含み益率の推移
(対象：NISA口座ありの利用者)



● ● 3-3. 年代別NISA口座含み益率の構成比
(対象：NISA口座ありの利用者)



④ Z世代の投資戦略：「コア」に投信、「サテライト」に暗号資産

ここまででは主にNISAに焦点を当ててきましたが、続いてNISA枠外も含めた金融資産全体について分析していきます。年代別運用先ポートフォリオに注目すると、年代ごとに異なる戦略があることが見えてきます。（図4-1）

Z世代にあたる10～20代は、投資信託が71.2%と高い一方で、暗号資産も3.6%と全年代でも最も多く組み込まれており、NISAで投資信託を堅実に運用しつつ（コア）、枠外では暗号資産のようなハイリスク・ハイリターン商品に挑戦する（サテライト）というコア・サテライト戦略が見て取れます。

一方、30代以降は、主軸は投資信託であるものの6割弱に抑えられており、国内株にも2～3割程度の投資資金を回すなど、NISA枠にとらわれず、個別株投資を行っているのが特徴です。逆に暗号資産のようなハイリスクな商品をポートフォリオに組み込む率は年代が上がるごとに少なくなっています。

● ● 4-1. 年代別運用先ポートフォリオ(資産構成比)

	10~20代	30代	40代	50代~
投資信託	71.2%	55.1%	56.1%	43.7%
国内株	16.1%	21.5%	23.8%	31.4%
外貨預金	0.3%	0.4%	0.2%	0.5%
外国株	4.2%	11.6%	5.8%	8.7%
暗号資産	3.6%	1.9%	0.9%	0.3%
確定拠出年金	3.2%	6.4%	8.0%	8.1%
ロボアド	0.8%	0.7%	1.7%	2.4%
債券	0.5%	2.2%	2.0%	3.9%
商品	0.2%	0.3%	1.5%	1.0%

④ Z世代の投資戦略：「コア」に投信、「サテライト」に暗号資産

金融資産全体におけるカテゴリ別保有率を見ても、投資信託はどの年代も4分の3以上の利用者が保有する主軸カテゴリです。10~20代では資金が少ないなかで行っていた投資信託以外への投資が、30代以上になると幅が広がっていることが見て取れます。

資金余力や投資経験によるカテゴリの幅はあるものの「投信での堅実運用」と「枠外でのリスクテイク」を使い分ける、メリハリのある投資スタイルが全年代で定着しているようです。

● ● 4-2. 年代別資産カテゴリ別保有率

	10~20代	30代	40代	50代~
投資信託	87.0%	86.4%	82.3%	76.9%
国内株	38.0%	48.7%	57.2%	64.5%
外貨預金	11.1%	22.2%	20.5%	16.8%
外国株	10.7%	19.8%	21.6%	18.7%
暗号資産	9.5%	10.5%	9.7%	6.3%
確定拠出年金	6.4%	15.0%	15.1%	10.4%
ロボアド	4.2%	6.7%	10.5%	11.2%
債券	2.1%	2.5%	5.3%	6.0%
商品	1.9%	4.1%	4.1%	4.8%

④ Z世代の投資戦略：「コア」に投信、「サテライト」に暗号資産

年代別投資信託運用先ポートフォリオを見ると、世代による「投資対象の広がり」の違いが鮮明です（図4-3）。

Z世代である10～20代は、「S&P500」が40.0%と突出しており、外国株式・全世界株式を合わせた広域インデックス商品が全体の9割以上を占めています。若年層ほど、まずはリスクを抑えた王道のインデックス型から資産形成をスタートさせる傾向があるようです。

そこから年齢が上がるにつれて投資対象は変化していきます。50代以上ではS&P500の比率が17.6%まで下がる一方、債券、REIT、バランス型商品（コモディティ）などの比率が上昇しており、資産を「増やす」段階から「守る・安定させる」段階に入っていることが読み取れます。

このようなポートフォリオの変化から、各年代の資産状況やライフステージの変化に合わせて運用先を選んでいることがうかがえます。

● ● 4-3. 年代別投資信託運用先ポートフォリオ(資産構成比) (対象：投資信託を保有している利用者)

	10～20代	30代	40代	50代～
S&P500	40.0%	28.5%	24.8%	17.6%
外国株式	25.9%	36.3%	36.3%	42.9%
全世界株式	25.9%	21.3%	23.5%	14.8%
国内株式	4.5%	6.9%	6.5%	9.5%
債券	0.7%	2.6%	2.2%	6.9%
バランス	3.1%	2.3%	4.4%	4.8%
REIT	0.2%	0.6%	1.3%	2.3%
商品	0.8%	1.6%	1.0%	1.3%

⑤ 投資商品ランキング：海外インデックス投信が主軸

続いて、具体的な保有商品ランキングを見ると、資産形成の核を「海外株インデックス」に置く傾向が顕著です（図5）。

投資信託カテゴリでは、「外国株式」「S&P500」「全世界株式」が保有率40～50%台でトップ3を独占しており、多くの投資家が米国や世界経済の成長を取り込むインデックス投資を優先している実態が見えてきました。

一方、個別株投資では「身近な大型株」が人気です。国内株式では知名度が高く配当が期待できる銘柄が上位を占めます。外国個別株ではエヌビディア等のハイテク株が注目されていますが、実際の保有率は最も多いエヌビディアでも3.8%に留まっています。

「投資信託で世界経済の成長を堅実に享受しつつ、サテライト的に国内の高配当株などを保有する」という投資スタイルが定着しているといえます。

● ● 5. カテゴリ別保有銘柄ランキング（投資信託・国内株式・外国株式）

投資信託			国内株式			外国株式		
1	外国株式	53.6%	1	NTT	20.0%	1	エヌビディア	3.8%
2	S&P500	48.6%	2	ソフトバンク	14.0%	2	AT&T	2.4%
3	全世界株式	43.8%	3	楽天グループ	7.4%	3	アップル	2.3%
4	国内株式	30.2%	4	三菱UFJフィナンシャルグループ	7.3%	4	特斯拉	1.8%
5	バランス	16.7%	5	三菱商事	5.0%	5	コカ・コーラ	1.8%
6	外国債券	12.9%	6	イオン	4.8%	6	マイクロソフト	1.4%
7	商品	9.7%	7	三菱HCキャピタル	4.5%	7	ファイザー	1.2%
8	REIT	6.6%	8	ENEOSホールディングス	4.5%	8	インテル	0.7%
9	国内債券	6.6%	9	KDDI	4.5%	9	ペライソン コミュニケーションズ	0.6%
10	全世界債券	0.8%	10	セブン銀行	4.3%	10	パランティア・テクノロジーズ	0.6%

※ 数値は、各カテゴリ（投資信託・国内株・外国株）を保有している利用者内での銘柄別保有率

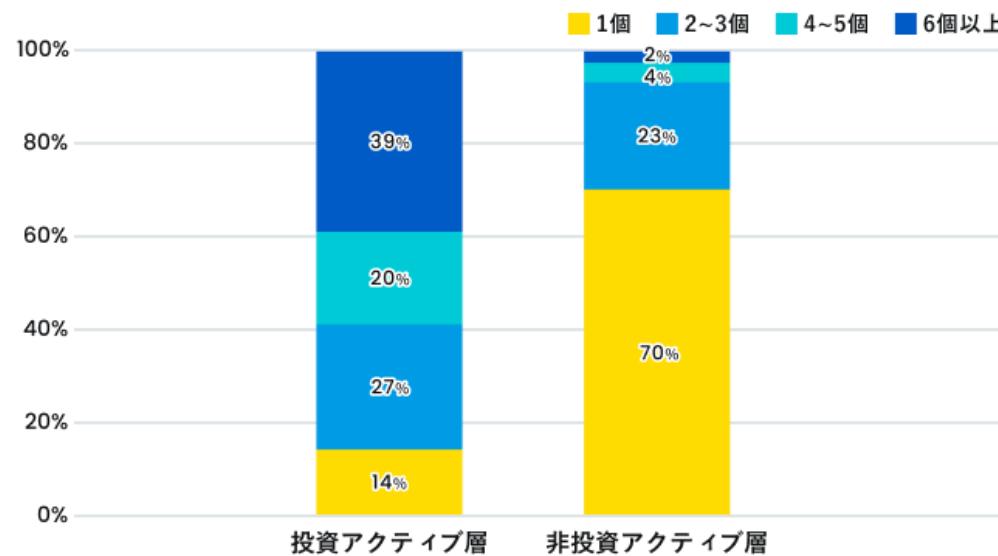
⑥ 投資アクティブ層：投資用以外も含め多くの金融機関を使い分け

多様な資産カテゴリに投資し、投資額・含み益も増加傾向にあるため、資産の動きが活発な投資アクティブ層ですが、資産管理の方法に違いはあるのでしょうか。投資アクティブ層とそれ以外の層とでレコードの使い方を比較したところ、そもそも、連携している金融機関の数に大きな違いがあることが見えてきました。

投資アクティブ層は、金融機関を2個以上連携している利用者が9割弱を占め、その中でも「6個以上」が約4割と最も多くなっています。逆に、それ以外の層は「1個」が7割と最も多く、歴然とした違いが見られました。

投資アクティブ層は、マネー感度が高い層であるため、単に投資口座が1個増えるというだけでなく、投資以外の目的でも金融機関を複数使い分けるなどしており、それらも含めた煩雑な資産管理をレコードのようなツールを用いて行っているようです。

● ● 6. レコード機能への連携金融機関数



おわりに

今回のリアルデータ分析により、新NISA開始以降、NISA口座保有者が増加、投資アクティブ層の約7割が活用しており、なかでもZ世代のNISA保有率は77.1%と全年代で最も高いことが明らかになりました。

投資額・含み益共に大幅な増加傾向にあり、投資信託を中心とした「守り」のコアと「攻め」のサテライトに分けて堅実な資産形成と高いリターンを狙うコア・サテライト戦略をとっている利用者が多いことがわかりました。また、投資アクティブ層は、投資用以外も含めた複数の金融機関の口座を使い分けており、煩雑な資産管理をツールを使って行っているようです。

資産運用が「多様化・複雑化」していく中で、長期的な資産形成を成功させるためには、自身の資産全体を正確に把握したうえで判断することがますます重要になっています。

マネーインサイトラボは、今後も様々な切り口でデジタル時代における資産運用の実態を調査・分析し、皆さんにお届けしていきます。

マネーインサイトラボについて

マネーインサイトラボは、ふくおかフィナンシャルグループ傘下のみんなの銀行と*iBankマーケティング*が共同運営するお金に関する調査・研究組織です。デジタル時代における、人々のお金に関する意識・価値観・行動の変化や、新しい金融サービスの可能性について新たな視点を見出すことを目的に活動していきます。

調査内容に関するお問合せ・アンケート調査のご依頼

マネーインサイトラボ運営事務局

今村・岡（株式会社みんなの銀行）

TEL : 092-791-9231

E-mail : pr@minna-no-ginko.com

【PR】みんなの銀行「レコード」について



アプリひとつで銀行口座もカードも、自分のお金をまとめて管理

お金の管理をしたいけれど、家計簿をつけるのは面倒！そんな方にぴったりなのが、みんなの銀行の「レコード」機能です。

レコードは、お持ちの銀行口座や証券口座、クレジットカード、確定拠出年金、電子マネーなどの金融サービスを連携することで、残高や引落し額などを一元管理できる機能です。

残高や推移・利用額が自動でグラフ化されるので、通帳を記帳したり複数のアプリを開く手間がなくなります。

また家計簿アプリと違って、自分のお金の状況を確認した後、そのままアプリ内で他の口座にお金を移動したり、資金が足りない場合は借入したりできるのが特徴です。

複数の口座やクレジットカードを使い分けている方の拠点としてぴったりのサービスです。

主な特徴とメリット

- みんなの銀行の口座だけではなく、ほかの銀行口座やクレジットカード、電子マネー、証券口座などを「無料」で「連携数の上限なく」連携できます。
- 連携したすべての資産の増減がグラフで一目でわかります。銀行口座やクレジットカードごとの収支、証券口座ごとの資産推移の確認も可能です。
- 口座の残高やクレジットカードの引落し額を確認したら、残高が足りていない口座にアプリ内でそのまま振込やことら送金でお金を送ることができます。
- 明細に「#コンビニ」「#ランチ」など自分だけのハッシュタグをつけることで、タグごとの支出額を確認できます。

[みんなの銀行レコード機能詳細ページ▶](#)